

リツセとロダの話

「——ほら、かわいくて美人な女の子に貢ぐと考えたら？」

「お、おう…………」

「……くそつ。どうせ私は猫草だよつ」

「まあ落ち着けよ。意味もわからん」

ようやくリツセがちよつかい出してこなくなつたので、エイルの意識は思考の中に埋没していく。

「寝たね」

「そうだな」

「」と「」と揺れる馬車の中、エイルは寝てしまった。

これから 黒皇狼オーブシディアンハウルフ を狩りに行くところである。まだ夜が過ぎていらないほどの早朝で、何もなければリツセも寝ている時間ではあるのだが。

それでも、馬車内に三人いて、同年代の片方が寝てしまふと、リツセの話し相手は必然的にロダだけとなつてしまふ。

リツセとロダは、一見親しそうに接してはいるが、実はそこまで付き合いが長いわけではないし、親しくもしていない。

リツセがハイディーガへ移動する際に会い、数日ほど一緒に旅をした、くらいの仲である。その間に魔物を狩る姿を見せてもらつたり、いろんな話をしたものの、あまり個人的な話はしていない。これがいい機会と見るべきか、立場や役職を考えて軽はずみに質問するべきではないのか。

エイルという緩衝材がいるから、やや打ち解けた風に話もできたが、いざ一対一となると、なんだか身構えてしまう——

「ちよつと明るくなつたか？」

「え？」

ロダの急な発言に、何事かとリツセは考える。

——明るい？ 空を見ればまだ余裕で真つ暗なのだが。

「君自身のことだよ、リツセ」

「え？」

発言の意図そのものを言われても、それでも何事かとしか思えないリツセである。

——自分が？ 明るい？ 明るくなつた？

「あの、なんのこと？ よくわからないんだけど」

「お？ ジやあ無自覚か？」

リツセは、暗殺者を育成する施設で育つた。

表向きは孤児院だったが、裏ではおよそ子供にさせるようなことではない、常軌を逸するような訓練ばかりが行われていた。

同年代の子供たちと一緒に学び、競い合い、リツセは常にトップの成績を残してきた。

実技面でも知識面でも、リツセと並ぶ者など一握りだった。

「あの……忘れてくれない？」

ロダが言っている「冗談なんて一つも言わなかつた」というあの時とは、ほんの一ヶ月強、二ヶ月弱ほど前の話である。

そして、今あの時を振り返ると——ただただ恥ずかしいばかりの話である。

確かにあの時は、冗談でもそうじやなくとも、誰かに「お金くれ」なんて言えなかつただろう。「明るくなつたんじやなくてさ、前は調子に乗つてただけだからさ……」

——リツセの育つた施設は、ナステイアラ王国に点在する育成施設の中では、最も難易度が高いとされていた。

その施設でトップを走つてきたリツセは、いわゆるエリート中のエリートと言える。

そう、要するに、エリート意識が強かつたのである。

そういう意味でエリートぶつて調子に乗つていたのである。自分はエリートである、という自負もあつたし、それを誇つてもいた、のだが。

「ふーん。調子になあ」

ロダはニヤニヤしている。

「別にそのまま乗つてもよかつたんだぜ？」



「出会つた時から見て、少し性格が明るくなつたな、って思つてな」

「そう言われても、それでもリツセにはピンと来ないのだが——」

「——あの時は冗談なんて一つも言わなかつただろ」

「そう指摘されて、ようやく心当たりが見つかった。」

「やめてよ。思い出すのも恥ずかしいんだから……」

「今リツセからすれば、ただただ汚点でしかない。」

「いや、結構本気で言つてる」

「じゃあニヤニヤするな。本気で言つている者の顔じゃないだろう。」

「だが本当に、ロダからすれば、リツセのエリート意識は邪魔ではなかつたのだ。」

「その意識があつたからこそ、周囲の模範となるべきという想いも強かつた。何事も生真面目に打ち込む姿は、学ぶ側の姿勢としては理想的な優等生だとさえ思つていた。」

「まあ、真面目過ぎるとも思つていたが。」

「やっぱりそこのメガネの影響か？」

「……そうだね」

「施設ではトップだったが、いざ施設から出て自由にできる時間が貰えたら——リツセは自分の無力を強く感じたのだ。」

「対人は強い。」

「様々な知識も身に付けた。」

「その二つは、施設でしつかり磨いてきた。そんじよそちらのベテラン冒険者にだつて負けない自信がある。」

「ただ、それ以外が必要とされる場面が、非常に多かつただけだ。」

「——特に魔物狩りは、足りないものだらけだった。」

「——そしてすぐ隣に、自分に足りないものをたくさん持つている少年がいた。」

「最初こそ持ち前のエリート意識と負けん気で、なんとかエイルを見返してやりたい、なんなら実力差を見せつけて見下してやりたいと思つていたが……結局それは叶わなかつた。」

「というか、それどころではなくなつた、と言つた方が正確かもしれない。」

「生活と訓練を、己の腕と能力と意志で両立させなければいけないとなつた瞬間から、誰かと競争している場合じゃないという現実に気づいたのだ。」

「エリート意識ではお金を稼ぐことはできない。」

「身に付けた知識の中には、明日の生活費を得る方法なんてなかつた。」

「施設では誰にも迷惑を掛けずしつかりやつてきたつもりだったが、いざ野に放たれてみれば、いかに環境におんぶに抱っこされていたのか、嫌でも身に染みた。」

「——「何がエリートだ、どこがエリートだ」と思った瞬間が、リツセには確かにあつたのだ。変わつたと言うなら間違ひなくその瞬間である。」

「そう——訓練の道が分かれ、エイルがソリチカを師と呼び出した後。」

「時間と体力に余裕ができたエイルが食事当番を担つてくれて、自分よりおいしい料理を作つてくれた時に。」

「思い知つたのだ。」

「——「何がエリートだ、思つていてる以上に実力が足りないぞ！」……と。」

「おまけに、薄々ではあるが、剣の腕と暗殺者方面の知識以外は、すべての要素でエイルに負けて

いるのではないか、と気づき始めていた。

というか、十中八九負けているだろう。

しかも、彼は暗殺者を育てる施設から来たわけではない、という事実も付加すると……

——「エリートなんの役にも立たないな！」と思わずにはいられなかつた。

思つてしまつた以上、奢り高ぶれる理由なんて、欠片ほどもないじやないか。

「良いか悪いかはわからないけど、気は軽くなつたかな」

なんというか、もう誰にも舐められないよう肩肘張らなくてもいいかな、と。そんな思考が芽生えたのはいつだつたか。気が付いたら自然とその事実を受け入れていたと思う。

だつて自分は役に立たないエリートだから。

役に立たないくせに意識だけ高いなんて、ただただ滑稽でしかない。

持ち前の気の強さと負けず嫌いは性格上のアレなので残つてしまつたが、エリート意識の方は、もうすっかり枯れ果てて萎びていると思う。

ロダは「そうか」と軽く頷く。

「まあ楽になつたんならいいじやないか。余裕がなくてカリカリしている女性は真綿のように優しく包み込んであげたくなるもんだが、一緒にいるなら穏やかな方がこつちも楽だしな」

「前より魅力的になつたかな？」

「……」

「なんでそこで黙るんだよ」

「ガキには興味ないからだ。リッセはまだ守備範囲外だな。五年後を楽しみにしてるぜ」

「おい。素直すぎない？」

リッセがそう言つた瞬間だつた。

「——俺の報酬つて出るの？」

「あ、起きた」

寝ていたエイルが起きて、起きるなりそんな質問をするのだつた。

なお、エイルは寝ておらず、考え方をしていただけである。

まあ話はまったく聞いていなかつたが。